
満月

なつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

満月

【Nコード】

N2337L

【作者名】

なつき

【あらすじ】

「満月に恋をしている。闇を照らす光の球は、儚げで、触れたらその瞬間光を失いそうで、なのに絶対に手は届かなくて、満月と私の差異に軽い倦怠を覚えた。」

満月に恋をしている。闇を照らす光の球は、夢げで、触れたらその瞬間光を失いそうで、なのに絶対に手は届かなくて、満月と私の差異に軽い倦怠を覚えた。

月は一体何歳だろう。彼女は地球をずっと見ている。この地球の変化を嘆いているのだろうか、地球は何も変わっちゃいないと欠伸でもしているのだろうか、地球に恋焦がれたりはしないのだろうか。下らない考えに苦笑して、白色のジャンパーを掴んだ。部屋に満たされた闇を切って、外に出る。

マンシヨンの階段を、金属音を響かせながらのぼっていく。その硬い響きで世界が目覚めてしまいかもしれないというほど、しっかりと階段を踏みしめて、駆け上がる。この音で誰かが起きてくればいい。誰も起きてこなければいい。私は少しずつ満月に近づく。

屋上へ続くコンクリートの階段に出ると、ジャンパーのポケットから鍵を取り出した。きよんとした表情のピンクのくまがついた、屋上への鍵。屋上が好きだからと管理人さんに頼んで、二年前に作ってもらった。でもね、くれぐれも変なことはしちゃあいけないよ、と彼は言った。変なこと、とは、私が小さい頃にこのマンシヨンで起きた自殺のこと。大丈夫、私は飛び降りなんかしない。離れていく月を仰ぎながら落ちていくのが最期だなんて、嫌だからだ。まっとうに生きれば、月が見ていくくれる気がする。自分に恋するちっぽけな存在を、いつかきつと、暖かく迎え入れてくれる気がする。そのとき私は月に抱かれる。途方も無い夢。

小さな音をたてて、鍵が開いた。この音がとても愛おしい。扉を軽く押すと、快く私を受け入れてくれる。

広い、開いた。いつ来ても、はじめにはそう思う。世界の広さに立ち尽くす。このマンシヨンは結構高いから、視界を遮るものが殆どない。ただ月の光が煌々と、寝静まった平べったい街を照らして

いる。どこまでも平野だ。

後ろでドアの閉まる音がした。真っ直ぐ歩き、手すりに腕を乗せる。

見上げれば、そこには満月。目が合うと、ひっそり笑い返してくれた。ほら今日も、私を待っていてくれた。二十八日に一度、満月が最も美しく着飾る日に、私はこうやって彼女に逢いに来る。

満月の色に染まって、私の思考は分散していく。

平凡な人間だ。才能なんか何にも無くて、頭が良いわけではないけれど、変な要領ばかりよくて、いつも仲間とくつついてくすくす笑っている、そんな人間だ。そんなその他大勢のうちに過ぎない人間は、どうやって生きていくのだろう。どうやって生きていけるのだろう。

息を吐くと、空気は白く染まる。黒に白はよく映える。

下らないお喋りに貴重な青春を浪費していくときに心で呟く言い訳は、「本当の私はまだこんなものじゃない」。笑ってしまう。本当の私？そんな人間、どこにもいないのに。私はいつまで、「本当の私」を探し続けるのだろう。理屈でわかっているけど、心が受け付けない。現実なんか見れない。見たくない。

街の灯は、ゆっくりと、でも確実に減っていく。この風景を見るといつも、命の灯火が減っていくところを連想する。ふうつと息を吹きかければ、全ては消えてしまうのだろうか。

夜が好きだった。その深い深い黒色は、私をそのまま呑み込んでくれそうだったから。感情さえもブラックアウトさせてほしかった。煩わしかった、すべてが。家族も、友達も、関わっている人すべて、青空も、音楽も、関わっているものすべてを、断ち切ってしまったかった。私はすべてが好きだったのだ。大好きで、しかたなかった。だからこそ、その愛情に絡み取られた。編み物で失敗したときのように、しゅるしゅると世界を解いてしまえばいいのに。眠れない夜にはそんなことを延々考えた。

ゆっくりと、空を見上げた。確かにそこには、私の恋焦がれるも

のがいた。思わず苦笑してしまう。

あなたに恋したのは、ちょうど一年前、寒さに心をも支配されていた冬だった。塾に通い始めたばかりの帰り道、あたりの明るさに驚いて見上げると、そこにはあなたが、昂然とそびえていた。あなたも確かに何もかもを照らしてしまうけれど、それは太陽のように暴力的ではなかった。劣等感と優越感の狭間で揺れ動いて混乱している私を、ただただ黙って、包み込むように照らしてくれた。そのとき想像した。私のまわりにいる、大切な人、嫌なやつ、それこそすべての人が、この柔らかい布にくるまれていてるところを。

満月は、何も言わなかった。表情さえ変えずに、私の話を聞いていてくれた。球体は、神様がこの世に与えた奇跡のひとつだ。

愛というのは、言葉を変えれば独占欲でもある。私は世界に嫉妬した。私ひとりを照らしてほしかった。私ひとりを見て、守ってほしかった。月に愛されたかった。私は特別な存在だよ、と囁いて、証明してほしかった。こうして満月と対話をしていると、自分だけが満月の美しさに気づいている錯覚がする。だから私は満月が好きなのだ、結局自分が大好きなのだ。

空気は凜と鳴る。どこまでも深い夜。どこまでも透明な闇。

あなたとこうして対話しているときだけ、本当の私になれるなんて言ったらあなたは苦笑するだろうか。まだこんなものじゃない、そう思っているうちに可能性は身体中から滑り落ちていく。媚びるように笑って、どうでもいいやつの悪口を言って、他人の心の傷を受け止めて傷ついていく。倦怠にまみれた日常。そんな毎日を送るうちに、いつの間にか私のまわりには透明な壁ができていた。私自身でさえ壊せない壁。それは私の牢獄だ。親しい他人の中で、私もがいている。声をたてて笑いながら、血を吐いている。

風が柔らかく地上を撫でていった。夜の風は不思議と優しい。

甘ったれるな、そう言われたって仕方がない。だって誰しもが苦しいのだから。能天気には笑っている彼女も、ぎゃあぎゃあとうるさい彼女も、片隅でひとり本を読む彼も、地獄を持っているのだ

るうから。そう思うと、私は一瞬全てが愛おしくなる。この世界に生まれてきたこと自体が、呼吸をすること自体が、人類共通の呪いだ。祝福だ。

見上げると、そこには変わらぬ満月。いや、彼女だって日々変わり続けているのだらう。私が変わらないだけで、ゆっくりと、成長をしているはずなのだ。

満月に照らされて、彼は今何を想っているのだらう。彼女は今何を考えているのだらう。彼らは今何を感じているのだらう。笑っているのだらうか、泣いているのだらうか、どんな激しい感情だって、満月は淡く抱き上げてしまふ。私のように。プラトニック・カタルシス、不意にそんな言葉が浮かんで、笑ってしまった。

明日からまた二十八日、狭い世界で生きるのだらう。一月に一度の、この日を待つて、あなたを待つて。自分の輪郭がぶれて暴れて、それでもあなたに照らされれば、そんなぶれさえも美しい残像かもしれないなんて幻想を抱けてしまふんだ。

泣きたくなって、はるか彼方に存在するはずの満月を見つめた。

満月は、物狂おしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2337/>

満月

2010年10月8日15時08分発行